
ルナチーク

ルナチーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルナチーク

【Nコード】

N3808E

【作者名】

ルナチーク

【あらすじ】

気がついたら、森の中にいら。戸惑っていたら、銀髪的美青年に保護され、この世界で、生きるすべてを学んでいく。分けの分からないまま、修行というなの、うさばらしに付き合わされる。一癖も二癖もある青年の元、薄幸の少女は、今日もひたすら、突き進む。いたい、何の為に此処にきたのか、誰か教えて！！！！

プロローグ

君に願ひ事は何と聞いたとき、君は何もいらないと答えたね。

僕が不思議そうな顔を見ると、君は苦笑して、答えたね。私達は、皆、この世界に生まれた時から、全てをもっている。

君は、いつも何も望まなかったね。そんな君を僕は、何て無欲な子だろうと。なんて滑稽なのだろうと、そして、なんと愛しい子だろうと思っていたんだよ。

僕はね、君が僕に話した事を少しも理解していなかったんだ。君は無欲な子ではなかった。いつもいつも、ただ、一つの事を望んでいたよね。願っていたよね。それは、他人からみれば、とても無価値で、単純な願いだけど、いつも声にならない声で叫んでいたよね。

いつも、その願いを叶えようと、必死に頑張っていたよね。ごめんね。僕は気がついてあげられなかった。いつも君の傍にいたのに。

今になって、やっと届いたよ。君の声が。

今になって、やっと理解したよ。君が僕に話した事を。

今になって、やっと分かったよ。君の願いが。

ごめんね。

僕は、もう君の傍にいる事ができないんだ。だから、君に全てを捧げるよ。僕の力と僕の意志を。

君に預けるよ。僕の心を。

僕は、君に出会えてすごく幸せだよ。不思議と心残りは一切もない

んだ。

ただ、もし、願いが叶うのなら、どうか、君が誰よりも幸せであるように。

誰よりも優しい君が、光と共に歩んで行ける様に・・・。

プロローグ（後書き）

こんにちは。初めて、小説を書きます。つたない文章ですが、楽しんで読んでもらえとうれしいです。

始まりは、突然に

此処は、世界で最も美しい森「レインボーフォレスト」。七色に光る湖に、翡翠の様に美しい木々、光あふれるこの森は、いつも静寂で神秘的な雰囲気漂っている。ここは、神の森とも言われ、地元の人々は、絶対に此処には踏み込まない。と、世間では知られていた。

「どかーん！！！」

大きな物音と共に、少女の絶叫が響きわたった。

「つつつ……師匠、いいかげんにして下さい。私を殺す気ですか！！！！！」

そう叫んだ少女のすぐ隣には、巨大なクレーターが出来ており、元の原型をとどめてはいなかった。

「アハハハ。レノンは、相変わらず、おこりんぼだね。僕がかわいい愛弟子を殺すはずないよ。殺す時は、相手にもう死にたいって思わせてからでは、ないかね。それに、僕を避難するのは、お門違いだよ。避難するなら、こんな事ぐらいで死ぬ、自分の軟弱を避難しなよ」

「アハハハではありません！！！！　こんな攻撃を受けて、生きているのは、師匠か、化け物だけです。つか、満面の笑顔で恐い事言わないで下さい。腹黒師匠。」

青年は綺麗な微笑みを浮かべ、無言でレノンにファイアーボールを放った。レノンは、今度は、攻撃を避けず心の中で、「スイバーク」

と呼びかけ、呪文を唱えた。

「ウォーターウォール」

火の玉が、レノンに当たる寸前に、水の壁がレンの前に現われ、攻撃を防いだ。その後、すばやく「ファイア」と心中で呼かけ、再び呪文を唱えた。

「ファイアーバタフライ。師匠覚悟！！！死ね！！」

無数の炎の蝶々が青年に向かっていき、辺り一面を焼き尽くしたが、そこには、青年の姿はなかった。ふと、背後に気配を感じ、「まだまだ、甘いよ」と聞いたのを最後にレノンの意識は途絶えた。

私は、あかつきの曉麗野。18歳だ。レノだと呼びにくいらしく、師匠は私を

レノンと呼ぶ。だから、私はこつちの世界だとレノンアカツキだ。そもそも私は、こつちの世界の住人ではない。真正正銘の日本人だ。染めるのが、嫌いだったから、今時珍しい、肩までの漆黒の黒髪だ。背が人より少し低い為か、实在年齢より低く見られるのが悩みだ。親は、小さい頃に他界していて、天涯孤独な他には、至って普通な高校生だった。そんな、私が、なぜ、この世界に来たかというところ、現在私のバカ師匠であるカイトルナチークのせいだった。師匠が私をこの世界に呼んだのだ。どうして、私を呼んだのか尋ねれば「何となく、寂しかったから？」と質問を質問で答えられ、用がなければ、元の世界に返せと言えば、「無理」と一言。頭が痛くなり、うなっている私にさらに、師匠は笑顔で「僕の弟子になって、魔法を学びなよ。どうせ、帰れないのだから、魔法でも学んで、楽しむよ」と。「ふざけるな~~~~~!!!!!!」と絶叫がしたが、結局、言われた通り弟子になった。もともと、元の世界に心残りもなかった。

たので、この世界で生きるのもさして、抵抗はなかった。私の意見はまるで無私だが……。

師匠が言っていた通り、確かに魔法は、楽しい。そもそも、私は魔力が高いらしい。魔法を使うときは、自分の魔力を変化させ、形にさせるのだが、私の場合は、精霊達の力を借りていた。（後々、精霊達の事については、後で説明するが、私は、精霊の姿を見て、普通に会話する事ができた。これも、魔力が高いから出来る事らしい。普通は、精霊の声を聞けばいい方だという。）精霊達と契約し、精霊の力を使っていた。私は、契約をしたつもりがないのだが、お互いの真名を交換すれば、契約成立だ。後は、彼らの力を使いたい時に、名前を呼び、形や効力をイメージして、具現化をすればいいようにするに、どのような効果や形にしたいかは、私の想像力にかかっている。私は、イメージしやすい様に名前をつけ、声に出している。これを勝手に呪文と読む事にしている。魔力が高いのなら、わざわざ精霊の力を借りずに、自分の魔力をつかえば、いいのでは、と思うかもしれない。実際に、自分の魔力を使ってみましたよ。ええ、使いました。につくき・尊敬すべき、師匠を実験代に……もと、師匠に協力してもらって。意気揚々と自分の魔力を使って攻撃を仕掛けた所、制御ができずに、自分にくらい、自爆した。次の日、魔力の使いすぎで、動けなかった。それから、誓ったのだ。二度と自分の魔力を使わないと。

魔法を習い初めたのは、面白そうだと思ったのと、右も左も分らないこの世界で生きて行くすべになればと思い、師匠の提案に乗った。が、今は違う。目標は、憎き我が師匠を倒して、負けました。と言わせる事。あの、へらへらした顔を苦痛でゆがめてやるのだ！！

始まりは、突然に（後書き）

二話目です。文章を書くのって難しい……。はちゃめちな文章ですが、目をつぶって読んで下さい。

4人の精霊達

気がつくと私は自分のベッドで寝ていた。起きようとしたが、体が痛くて動かせない……。どうしたものかと、考えていると、ドアがあいた。

「おや、やっと起きたんだね。あれくらいで、寝込むなんて本当に情けないよね。はあ」

無責任な事をいいながら、師匠が入ってきて、近くの椅子に腰をかけた。

「あれくらいとは、なんですか。あれくらいとは！！！！至近距離で、電撃をくらわしたくせに！！！！そもそも、修行という名目で私をいたぶるのを止めて下さい！師匠に付き合っていたら、命がいくつもあってもたしません！！私は、師匠とは違って普通の人間なんです！！！！」

「人を化け物みたいな言い方やめようよ。普通より少しきつい修行をしたくらいで……。レノンだって、大きな怪我もなく、生きているんだから、細かい事をきにするのは、やめようよ。女々しいよ？」

「あれの何処が少しきつい修行なんですか！！！！！！今まで生きていたのが自分でも不思議なくらいです！！！！」

そう。あれは、すこしきつい修行なんて、可愛いものではない！持久力を付ける為と言われ、畏がしかけてある山を人食いオオカミと追いかけてこさせられたり、魔法に耐性をつける為と言われ、山を

跡形もなく吹き飛ばす威力のある魔法を防がされたり、部屋を埋め尽くす書物を1日で読めと言われたり・・・何度命の危険を感じたか、もう数えきれない・・・私が、死にものぐるいで課題を終わらせると、師匠は綺麗に微笑んで、「軟弱だよね」とほざきやがる。その度に、切れて、師匠に攻撃するが、これもまた、笑顔で反撃され、酷い目にあう。師匠と修行を初めて、もうすぐ半年。よく生きてきたと、自分で自分をほめたい！！そもそも見た目は、優男なこの男に、どこにそんな力があるのか・・・顔もよし、頭もよくて、強い。神様は絶対に不公平だ！！

私がうなりながら、師匠を無視して、自分の考えに浸っていると、人の気配が突然増えた。どこから現われたのか4人の男がいた。4人とも世に言う美男子と言うやつだ。赤い髪と瞳を持つ、活発な男は、ファイアと言う炎の精霊だ。

「アハハハ。また、カイトにやられたのか？姫は相変わらず抜けるよな」。もっと協力的な炎をぶつけてやればよかったのに。」

「本当ですよ。こんなうさんくさい男に遠慮はいらないんです。殺しても死なないのでから。それよりも、怪我をした所を治すので見せてください。」

さらりと、師匠に向かって酷い事を言ったのは、蒼い髪と瞳を持つ、知的な男だった。彼は水の精霊で名前をスイバークと言う。レノンが傷を治してもらっていると、茶色の髪と瞳を持つ、武人風な大地の精霊、ガイアが瞳を覗き込んできた。

「主よ。きちんと休息はとっているのか。少し疲れているようだ・・・。無理をせずにいつでも我の名を呼んでくれ。主を傷つける全ての物から守ってみせる。主が望むのなら、今、ここで、この不屈

きものの優男を葬る事も可能だが？」

「アハハハ。こいつ葬るなら、ワテも参加する。カイトの苦しむ顔見てみたいんや。」

ガイアと物騒な事を話しているのは、金髪の髪と金の瞳を持つ、風の精霊ウィーザー。この4人の中で一番おちゃらけていて、本気が冗談かいまいち分からない。

「ガイア、ウィーザー、私は元気だよ。頼むから、私の前で物騒な話をするのは、止めて。物騒なのは、師匠一人で間に合っているから……。それに、師匠は、私の実力で殺す。もとい、叩きのめすんだから!!」

私が、拳を握り、決意も新たに力説していると、これまで、ニコニコと他人事の様に聞いていた、カイトが突然話しはじめた。

「君達、そういう話しは、僕がない所で、もっと、密かに話して、念密に計画を立てる物だよ。そんな事より、丁度君達4人がそろって現れてくれて、呼び出す手間がはぶけたよ。君達に聞きたい事があったんだ。ちょっと最近、興味深い情報を手にいれてね。」

自分の暗殺計画をそんな事でかたづけるとは……。さすがは、大魔王。そういえば、

「師匠、珍しいですね？自分から動く何て……。普段、自分の特になる事が、私達をいたぶる事にしか、自ら動かうとしないのに……。何か悪いものでも食べましたか？何を食べたか教えて下さい。今度、食事に出すので。」

「うん。普段、君が僕をどのように見ているか、よく分かったよ。僕の愛が君にはまだ、分からないんだね。これからは、もっと、分かりやすく、愛情をかける事にするよ。覚悟しててね。」

師匠は、それはそれは、奇麗な笑顔で私に微笑み、一瞬にして青ざめた私を無視して、真面目な顔で話しを続けた。

「最近、少し面白くない情報を手に入れたんだよね。奴らがこの森に向かってるって。」

それを聞いた4人も真剣な顔になった。普段、おちゃらけて、可愛い？冗談を言い合っている彼らだが、とても頼りがいがあり、お互い仲がよく信頼しあっている。私は、密かに彼らの関係を羨ましいと思っているが、絶対に口にはださない。師匠は、よほどでない限り、真面目にはならない。だから、彼らもこういう時の師匠の言う事は、真面目に聞く。しかも、師匠はこの森から一步も外にでないが、どこからか情報を仕入れてくる。不思議と師匠が仕入れてくる情報はいつも正確で間違いがない。

スイバークは姿勢を正すと、自分の知っている事を生理する様に話し始めた。

「半年前に出された迷惑なお告げを鵜呑みにして、それらしい人が自己、自他推薦とわず、何人も現われたそうですが、未だ誰だか分からない無能ぶりをさらけ出しています。しかも、こりずにまだ探しているそうです。勝手に探してくれる分には、何も問題がないのですが……。」

スイバークは、途中で言葉を切り、ウィーザーを見た。

「どうやら、奴さん達、この森にくるみたいなんや。なんでも、この近くに来た旅人がたまたま、村で買ひ物をしている嬢ちゃんを見つけ、はた迷惑な事に、わざわざ奴さん達に報告したらしいねん。で、真偽を確かめる為にこの森に向かつてただ今、進軍中。」

「ちよつつ・・・何でそこで、私が出てくるの？関係ないじゃん。」

「それがな、その予言が言うには、黒髪の少女を探せといってるらしくて、黒髪の姫が今回めでたく目につけられたそうだ。まあ、あいつらに見つかったら、問答無用であいつらの本拠地に連れていかれるだろうな。よかつたな・・・変にめだつて。」

ファイアにかかるくくくともない事を言われ、しばし現実逃避していると、ガイアはポンつと私の頭に手を置いた。

「主が心配する事はない。何があつても我らが必ず守るから。」

「そう言うなら、師匠から私を守ってるよ・・・。つか、師匠。私、嫌ですよ。分けも分らない事に巻き込まれるのは。それに、私何処にも行きたくありません。どんなに命の危険があろうと、死ぬ様な目に何度合わせられようと、師匠の傍にずっといるってきめてるんです。」

「うん。知っているよ。僕も面白い君を手放す気ないしね。だからこれから馬鹿な奴らのお仕置きする準備をするんだよ。せつかく遠路はるばる来てくれるのだから、たつぷりと歓迎してあげないとね」

そういつて、師匠は誰もが虜になる綺麗な笑顔で微笑んだ。私は、師匠のその笑顔に大魔王の顔をみた。そして、これから、師匠の標

的にされるであろう人々に、思わず同情をしてしまった。

この時私は、師匠の怒りには、絶対にふれないと固く誓ったのは、言うまでもない。

4人の精霊達（後書き）

やっと4話目です。次回は、精霊達の視線から書こうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3808e/>

ルナチーク

2010年10月10日01時40分発行